

# 中学校社会科歴史教科書に用いられるシヨウトスル

—— 過去のできごと文におけるシヨウトスルの分析 ——

宮 部 真由美

(キーワード：シヨウトスル，中学校歴史教科書，意志決定可能な動作主体，動詞の制御可能性，日本語教育)

## 1. はじめに

この論文は、外国籍の生徒など日本語支援を必要とする中学生に対する日本語学習・日本語教育を考えるものである。日本語支援を必要とする中学生にとって日本社会で生きていくことを考えると、高校へ進学することは重要な要素となる。そのためには日本語でコミュニケーションができるようになることだけでなく、国語や数学などの教科学習の内容も理解できるようにならなければならない。しかし、教科学習の言語は、Cummins(1984)がBICS(Basic Interpersonal Communication Skills)とCALP(Cognitive/Academic Language Proficiency)という用語を用いて述べているように、日常生活における相手がいて文脈が明確なコミュニケーションとは異なり、場面や文脈の支えがないため抽象的で難しい。

さらに、子どもたちへの日本語の支援の現状は、初期の日本語学習を終えたあとは日本語の学習時間が確保されることはほとんどなく、日常会話ができるようになったぐらいのレベルで、日本語母語の子どもたちと一緒に教室で学んでいかなければならない。日常会話と比較すると、より高度な教科学習の日本語を理解し、教科の内容を学んでいかなければならないが、十分な支援がないという現状である。

また、こうした現状に対し、具体的に教科学習の日本語のどのような部分が難しいのかという研究も少ない。Cummins(1984)によりCALP面に関する言語能力の育成の必要性が指摘されているものの、初期の日本語学習を終えたあと具体的に何をどのように教えればいいのかという研究はほとんどない。先行研究において教科書の日本語が難しいということは指摘されているが、研究の多くは教科書の語彙がどのようなものであるかというものである。教科書に記述されている内容を理解するためには、教科書の語彙(単語)を理解することとあわせて、単語を文にくみだてるための規則である文法についても知る必要があるだろう。

この論文では、中学校社会科教科書に用いられるシヨウトスルについて考えていく。シヨウトスルは日本語能力試験のN3の文法項目<sup>1</sup>となっており、初期の日本語学習では一般的に取りあげられない文法項目である。初級の教科書で「勉強しよう」のような意向形とよばれる形は学ぶが、シヨウトスルは「シヨウ」と「スル」を組み合わせることで理解できる文法形式ではない。また、社会科教科書は国語教科書と同様に教科書の文章量が多く、記述されている内容を理解しながら学んでいく教科書であるため、記述されている内容の理解が必要となる。そして、あとの節で述べるように、シヨウトスルの用例は社会科教科書のなかでは特に歴史教科書で多く使われていた。(1)は歴史教科書の用例である。

- (1) 聖武天皇は、仏教をあつく信仰し、仏の力を広めることで社会の不安をなくし、国を平安に導こうとしました。(育鵬<sup>2</sup>)

2で述べるように、シヨウトスルが表わす意味は、シヨウトスルの形をとる動詞の制御性とその動詞の動作主体が意志決定可能であるか(有情性)という点に関係している。本稿では、歴史教科書のシヨウトスルをこうした特徴から考察し、生徒たちにシヨウトスルの文を説明する際にどのような留意点が必要かということについて述べたい。そして、日本語支援者だけでなく、社会科担当の教員に対しても、日本語支援を必要とする生徒に歴史教科書のシヨウトスルの文を教える際の留意点として理解してもらえよう記述していく。

日本語支援を必要とする子どもにとって、日常生活の日本語だけでなく、教科学習の日本語の支援が必要なことは、多くの人が認識するようになってきた<sup>3</sup>。しかし、先にも述べたように教科学習を進めるにあたり、教科書の日本語にどのような特徴があり、どのような留意が必要なのかということに関する蓄積はあまりない。日本

語支援を必要とする子どもたちに対応する支援者が歴史教科書を教える際に、漠然と教科書の日本語にむかうのではなく、どのような注意点をもってみればいいのかを考えるための資料となるよう分析を進めていきたい。

## 2. 先行研究

山崎恵（1998）は先行研究でのシヨウトスルの分析を踏まえ、(2)のように主語となる名詞のタイプと「ようとする」に前接する動詞のタイプとの関連からシヨウトスルが表わす意味を3つに分類している。

- (2) ①<有情物>が<達成の自己制御性を持つ動詞>+ようとする  
何かを実行に移す直前の状態 [動作主体の意志・意向+アスペクトの意味]
- ②<有情物>が<過程の自己制御性を持つ動詞>+ようとする  
何かの実現を目指した行動 [動作主体の努力・意図・目的 (+アスペクトの意味)]
- ③<非情物>が<非自己制御性の動詞>+ようとする  
作用の起こる直前の状態 [アスペクトの意味]

本稿では、この山崎恵（1998）のシヨウトスルのとらえ方を用いることにする。本稿は歴史教科書のシヨウトスルを分析するうえで動詞の制御性やその動詞の動作主体が意志決定可能であるか（有情性）という点からみていくことが有効であると考えており、山崎恵（1998）の分析はそうした点から述べられている。

山崎恵（1998）は(2)のように分類したうえで、シヨウトスルは動的事態が時間的に展開するなかで達成直前をとらえており、動的事態の内的時間における把握の仕方を表わしわける機能をもつ形式であると述べ、シヨウトスルを分析的にとらえるならば、(3)のようにとらえることができると述べている。

- (3) 「～よう」の表す内容（非現実事態）を実現化する（行う）という能動的な意義を「する」は表示しており、全体でひとまとまりとなって未実現の動作・作用が実現する直前の局面を表す表現形式（山崎恵 1998：312）

また、竹村和子(2004)では主語となる名詞が有情物の場合に、それが一人称の場合か三人称の場合かにわけ、それぞれシヨウトスルの形（-スル、-シテイル、-シタ、-シテイタ）について、シヨウトオモウとの比較を行なっている。さらに、國澤里美（2014）ではシヨウトスルの使われやすさについて、「[「三人称主語」、「テイル形」、「従属節」、「意志制御性無」という条件を満たすほど]（p.71）使われやすいことを述べている。本稿では山崎恵（1998）の(2)、(3)のシヨウトスルのとらえ方を用い、國澤里美（2014）で用いられた主節／従属節の述語という点や、竹村和子（2004）や國澤里美（2014）でも分析の観点となっている主語の人称やシヨウトスルの形にもふれながら、歴史教科書における分析を行なうことにする。

## 3. 分析の対象と観点

中学校社会科の授業では、1、2年生で地理と歴史、3年生で公民について学習する。社会科教科書に現れるシヨウトスルについて、(4)の出版社の教科書<sup>4</sup>を対象として用例数を調べた。

- (4) 地理：社会科中学生の地理（帝国書院）、新編新しい社会地理（東京書籍）、中学社会地理（教育出版）
- 歴史：社会科中学生の歴史（帝国書院）、新編新しい社会歴史（東京書籍）、中学社会歴史（教育出版）、新編新しい日本の歴史（育鵬社）
- 公民：社会科中学生の公民（帝国書院）、新編新しい社会公民（東京書籍）、中学社会公民（教育出版）、新編新しいみんなの公民（育鵬社）

各教科書の本文に現れたシヨウトスルの数は表1のとおりである。表1をみると、シヨウトスルは地理と公民の教科書よりも、歴史教科書での使用が多いことがわかる。

表1 シヨウトスルの出現数

	帝国書院	東京書籍	教育出版	育鵬社	合計
地理	10	8	7	—	25
歴史	62	49	65	64	240
公民	13	29	21	20	83

用例数の違いはそれぞれの教科で扱う内容が異なるためである。たとえば、地理の教科書には世界や日本の自然環境、産業、人々の暮らしなどが記述されており、これらの多くは現在のことがらを中心に書かれている。公民の教科書には日本の政治、経済、日本国憲法、国際社会との関係などが記述されている。そして、歴史教科書には過去のことからやできごとなどが記述されている。文末の位置にシヨウトスルが用いられた場合をみると、歴史教科書ではほぼ過去形であるのに対し、地理と公民の教科書の場合は非過去形が大半であった。これは、歴史教科書には具体的な時間（過去）における具体的な動作主体の行為が描かれているが、地理と公民の教科書では現在や未来のことがらや、具体的な時間限定をうけない一般的なことがらが記述されているということが関係している。こうした記述内容の違いにより、それぞれの教科書の日本語に特徴があるといえ、シヨウトスルの用例数にも違いが現れているといえる。

次にシヨウトスルが文のどの位置に用いられているかについて調べた。文末に用いられるか、それ以外に用いられるかにわけ、さらに文末以外に用いられる場合は、連用修飾の位置に用いられるか、連体修飾（名詞修飾）の位置に用いられるかにわけて用例を数えた。連用修飾の位置に用いられたシヨウトスルは、確認すると中止形（～して、～し）や接続助詞と一緒に用いられており、複文の従属節の述語部分に用いられたものであった。

表2はシヨウトスルが文のどの位置に用いられていたか、その用例数を示したものである。「文末」はシヨウトスルが単文の述語や複文の主節の述語に用いられた場合を、「従属節」は中止形（～して、～し）や接続助詞と一緒に用いられた場合を、「名詞修飾」はシヨウトスルが名詞を修飾している場合を数えた。

表2 シヨウトスルの文での出現位置

	文末	従属節	名詞修飾
地理	11	3	11
歴史	78	49	113
公民	25	21	37

以上のように、シヨウトスルの用例数が多く、地理や公民の教科書と文末の述語のテンスに違いがある歴史教科書について分析していく。また、先行研究でも指摘されていたようにシヨウトスルが文のどの位置に用いられているかという点も分析の観点といえることから、表2で分類した文末の述語に用いられる場合、従属節の述語に用いられる場合、名詞を修飾する場合にわけてみていくことにする。そして、先行研究にあったシヨウトスルの形をとる動詞の制御性とその動詞の動作主体が意志決定が可能であるか（有情性）という点から歴史教科書のシヨウトスルについて分析していく。

#### 4. 文末の述語に用いられる場合

この節では単文の文末の述語、そして複文の場合は主節の文末の述語に用いられたシヨウトスルの用例についてみていく。

(2)で山崎恵(1998)は動作主体が有情物か否かでわけていた。まずは、シヨウトスルの形をとる動詞の動作主体が有情物である例からみていく。(5)、(6)のシヨウトスルの文には、それぞれ井伊直弼と聖武天皇の行為が書かれている。歴史教科書の有情物の人称は以下の用例からわかるように三人称である。

- (5) 井伊直弼は、幕府の政策に反対する大名、公家、尊王攘夷派の藩士を処罰し、これをおさえようとした(安政の大獄)。しかし直弼は、1860年、これに反発する水戸藩の元藩士たちに暗殺されました(桜田門外の変)。(東京)
- (6) 聖武天皇は、仏教をあつく信仰し、私の力を広めることで社会の不安をなくし、国を平安に導こうとし

ました。そこで聖武天皇は、国ごとに国分寺と国分尼寺を建て、都には東大寺を建てました。(育鵬)

(5), (6)は動作主体がヒトの例であった。歴史教科書では(7), (8)のように、幕府や国を動作主体のようにできごとを描く場合も多い。一般的に幕府や国名は有情物とはいいがたいが、歴史教科書においては、「幕府」のような政治機構体や、(8)の「日本」という国名でもって政治的な単位とみなせるものは、意志決定権をもつ有情物としてとらえることができるだろう。(7), (8)はそれぞれ幕府、日本による行為が書かれているといえる。

- (7) 幕府は、朝廷の同意を得て通商条約を結ぼうとしました。しかし、朝廷では反対意見が強く、ついに許可はあたえられませんでした。(育鵬)
- (8) しかし同じ4月に日本はソ連と日ソ中立条約を結び、北方の安全を確保したうえで、7月には石油などの資源を求めて、さらに東南アジアへ軍隊を進めようとしてしました。すると、アメリカは、日本への石油や鉄の輸出を制限し、イギリス・オランダなどと協力して経済的に孤立させようとしてしました (ABCD 包囲網)。(帝国)

シヨウトスの動作主体には、(5)~(8)のほか、ヤマト王権、朝廷、政府、GHQ、欧米諸国、ヨーロッパ、国際社会などがみられた。歴史教科書のシヨウトスを考えるとき、これらは意志決定が可能なもの(有情物)としてとらえる必要があるだろう。

先行研究でとりあげた山崎恵(1998)には「アスペクト的観点から見れば、時間的展開上、完結するはずの動作の達成直前の局面(未遂動作)を表現している。そのため、小説など物語文などの地の文において、「~ようにした」文はそこで終わると安定性が悪く、後続文で次の段階(時間的展開局面)が描かれる場合が多い。」(p. 309)と述べられている。(5)~(8)のシヨウトス文に後続する文をみると、後続文の最初に、「しかし」や「そこで」や「すると」のような接続詞が用いられ、シヨウトス文との関係が示されている。

後続文の接続詞は、(5), (7)の「しかし」、「これに対して、その一方で、一方」のように、シヨウトスの文で述べられることがらに対立することがらとしてつづけるものや、(6), (8)の「そこで」、「すると」のように、シヨウトスの文で述べられることがらにつづき起こったことがらをつづけるもの、(9)の「そのため」のように、シヨウトスの文で述べられることがらにより起こったことがらとしてつづけるものなどがみられた。

- (9) 勢力を拡大していく頼朝に対し、後白河法皇は、義経に官位をあたえて頼朝に対抗させようとしてしました。そのため頼朝と義経の対立は深まり、ついに義経は挙兵し、法皇も頼朝討伐を命じた。(育鵬)

ただし、必ずしも接続詞が用いられるわけではない。(10)では、シヨウトス文に後続する文には接続詞はなく、内容はGHQが行なった具体的なことがらが述べられている。接続詞を使用するとしたら、「そこで」でむすびつく関係であるだろう。(10)の文の内容を生徒が理解するためには、こうした説明が必要である。

- (10) 一方でGHQは、日本がふたたび連合国の脅威にならないよう、国のあり方を変えようとしてしました。過去の日本の歴史教育や政策は誤っていたという宣伝を日本側に行わせ、報道や出版を秘密裏に検閲して占領政策や連合国への批判を禁じました。(育鵬)

(5)~(10)の用例から、シヨウトスの文だけを考えるのではなく、後続文との関係も含め両者に表わされる内容を生徒たちに説明することで、シヨウトスの文の述語の行為が達成されないことがよくわかり、有益であるといえる。

さらに、シヨウトスの形をとる動詞に注目すると、その動詞の行為は、その時点(文の時間)において、未実現あるいは限界達成前であり、シヨウトスの形をとり、その行為の実現にむかっていることを表わしている。(5)~(10)では意志決定が可能なもの(有情物)が動作主体であったことも考えると、歴史教科書のシヨウトス文は、意志決定が可能な動作主体が自己制御性をもつ動詞による行為の実現(限界達成)にむけて何らかの行為を行なうことを表わしているといえる。

山崎恵(1998)は、(2)でみたように「達成の自己制御性」をもつ動詞であるか、「過程の自己制御性」をもつ動詞であるかを区別していた。厳密にはその通りであると考えられるが、歴史教科書のシヨウトス文の理解では後

続文に記述されることがらとの関係でそのことを理解すればよく、自己制御性をもつ動詞が「達成」か「過程」かという区別が文の内容の理解のために必須というものではないといえる。

最後に、(11)、(12)はシヨウトスル文のあとに文がつかない例である。これらはそれぞれ「ぶつかる二つの国際関係」、「日清戦争の始まり」というトピック名のついた文章の最後の文であった。次からは新たな「岩倉使節団」、「三国干渉と日英同盟」というトピックが始まっていた。

- (11) しかし、アジア諸国の中ではいち早く、そうした不平等条約を改正して対等な関係を築こうとしました。その一方で、朝鮮などに対しては、不平等な関係を結ぼうとしました。(東京)
- (12) 一方、それまで「眠れる獅子」とよばれ、存在感を示していた清はもろさを露呈したため、利権を求めるヨーロッパの国々は競って清に勢力を広げようとしました。(育鵬)

(11)、(12)では後続文がなく、このあとどのようにできごとが展開していくかは教科書では語られない。おそらく教師や資料などによって補足されるのであると思われるが、一方で、教師による補足がなければ、日本語支援を必要とする生徒は十分に内容を理解できない恐れがあるだろう。

## 5. 従属節の述語に用いられる場合

シヨウトスルが文末ではない位置に用いられたうち、連用修飾として用いられる場合は、シヨウトスルが「～が」や「～ため」などの接続助詞とくみあわさった形で用いられる場合と、中止形（～して／～し）の場合がみられた。このように、この節ではシヨウトスルが従属節の述語に用いられた場合をみていく。

あとの用例で示すように、シヨウトスルの形をとる動詞の行為については、文末の場合と同様、その時点（文の時間）において、未実現あるいは限界達成前であり、シヨウトスルの形をとり、その行為の実現にむかっていることを表わしていた。

(13)、(14)は接続助詞の用例である。従属節と主節に表わされることがらは、4でみたようなシヨウトスル文と接続詞のある後続文との関係と同様であるといえる。接続助詞が接続詞と同じようなはたらきをしている。

- (13) 1297(永仁5)年、幕府は徳政令を出し、御家人たちを借金などから救おうとしましたが、かえって社会を混乱させました。(育鵬)
- (14) また、朝廷は仏教の力によって国を安らかに守ろうとしたため、薬師寺などの寺が国によって建てられました。(育鵬)

次に、(15)、(16)のような中止形の用例をみる。

- (15) そこで桓武天皇は、新しい都で政治を立て直そうとして、784(延暦3)年に都を長岡京(京都府)に移し、次いで794年には現在の京都市に移しました。(東京)
- (16) これに対して、植民地の少ないイタリア、ドイツ、日本などは、自らのブロック経済圏を作ろうとして、新たな領土の獲得を始めました。(東京)

中止形の場合は、接続助詞の場合とは異なり、主節との関係が明示的ではない。永井鉄郎(1997:191)は中止形の複文(「～(A)ようとして…(B)」)は次の2つのパターンになることを指摘している。

- (17) ・ある目的(A)を達成することを目指して努力したにもかかわらず、予想外の結果(B)になった。  
 ・ある目的(A)を達成するためある動作(B)をする。

しかし、歴史教科書では(B)の部分が「予想外の結果になった」という用例はみられなかった。(15)、(16)のように新たなできごとが表わされていた。(18)のような結果的なことがらが表わされる場合もみられたが、予想外の結果ではない<sup>5</sup>。

- (18) このころ日本では、地方の豪族が反乱を起こし、また大和政権の中でも、蘇我氏や物部氏などの豪族が、それぞれの支持する皇子を大王にしようとして争いが続きました。(東京)

中止形の従属節となる場合は、従属節と主節との関係が明示的ではないため、どのような関係であるかを注意深く説明することが大切である。

## 6. 名詞修飾の場合

この節ではシヨウトスルが名詞を修飾する場合についてみていく。その際、被修飾語となる名詞に注目し、シヨウトスルの文の内容を説明する際の留意点を述べていく。また、シヨウトスルの形をとる動詞の行為については、ここまでと同様、その時点(文の時間)において、未実現あるいは限界達成前であり、シヨウトスルの形をとり、その行為の実現にむかっていることを表わしている。

被修飾語となる名詞に2つのタイプがみられた。一つは被修飾語となる名詞が意志決定が可能なもの(有情物)である場合で、もう一つは意志決定が不可能なもの(非情物)である場合である。被修飾語の名詞のタイプにより、文のなかでの単語のはたらきが異なっていた。それぞれ6. 1, 6. 2で述べていく<sup>6</sup>。

### 6. 1 被修飾語が意志決定可能な名詞

意志決定が可能な名詞とは、主にヒト名詞である。そのほか、4で述べたような、幕府などの政治機構体や国なども含む。こうしたものが被修飾語となる場合、シヨウトスルの動作主体は、シヨウトスルが修飾する名詞となる。たとえば、(19)では「後醍醐天皇」が「政治の実権を取りもどそうとした」の動作主体であり、(20)では「日本」が「朝鮮に勢力を広げようとした」の動作主体である。

- (19) こうしたなか、朝廷に政治の実権を取りもどそうとした後醍醐天皇は、幕府に不満をもつ公家や地方の武士によびかけ、幕府をたおす計画を進めました。(育鵬)
- (20) 開化派を支援して朝鮮に勢力を広げようとした日本は、朝鮮への支配を強めようとする中国(清)と対立を深め、軍備を強化していきました。(教育)

### 6. 2 被修飾語が意志決定不可能な名詞

意志決定が不可能な名詞はモノ名詞や現象名詞などである。こうした名詞が被修飾語となる場合、6. 1の用例とは異なり、シヨウトスルの動作主体は、シヨウトスルが修飾する名詞ではない。(21)では「労働者が団結して労働条件を改善しようとする」という名詞修飾節内にある「労働者」が「改善しようとする」のであり、(22)では「幕府は、朝廷との結び付きを強めることによって権威を取りもどそうとする」という名詞修飾節内にある「幕府」が「取り戻そうとする」のである。

- (21) 日清戦争後には、労働者が団結して労働条件を改善しようとする運動が、片山潜らの指導で進められました。(教育)
- (22) そのため幕府は、朝廷との結び付きを強めることによって権威を取りもどそうとする公武合体策に転換し、天皇の妹を14代将軍徳川家茂の夫人にむかえました。(東京)

そして、(21)では被修飾語の「運動」の内容が「労働者が団結して労働条件を改善しようとする」ということであり、(22)では被修飾語の「公武合体策」という政策の内容が「朝廷との結び付きを強めることによって(幕府の)権威を取りもどそうとする」ということである。

シヨウトスルの動作主体が誰であるのかが文に明示されない場合もある。(23)、(24)は「排斥しようとする」、「実現させようとする」の動作主体が明示されていない。しかし、これらの文の内容を理解するためには、誰によってその行為がなされるのかを知る必要がある。これらの場合は不特定の人が動作主体であるが、文脈から理解することになる。

- (23) 欧米諸国が居留地に軍隊を常駐させようすると、これを植民地化の危機として、朝廷を推し立てて欧

米の勢力を排斥しようとする、尊王攘夷運動が盛んになりました。(教育)

- (24) また、女性が政治に参加する権利を求める運動も本格化しました。一方、第一次世界大戦後には普通選挙を実現させようとする動きが高まりました。(東京)

(25)、(26)も動作主体が明示的ではない。「百姓や町人の間に」や「民衆の中に」という記述から動作主体が「百姓や町人」、「民衆」であることを理解しなければならない。被修飾語の内容を理解するうえで、動作主体の特定は必要なことである。そのため、(23)~(26)は生徒たちが文の内容の読み取りができていないのか注意が必要な文である。

- (25) いつ戦乱にまきこまれるかわからない状況のなかで、百姓や町人の間に今を楽しもうとする考えが広まっていきました。(帝国)

- (26) そのため、民衆の中にも、資源の豊かな「満州」を支配することで、不景気を解決しようとする考えが広まっていきました。(帝国)

## 7. 「意志・意図」と「直前」について

### 7. 1 シヨウトスルの「意志・意図」性について

一般的に第三者の意志、意向、努力、意図、目的のような心のうちを他者がうかがい知ることが不可能である。一方で、歴史教科書に記述されることがら・できごととは後世の人間が記述しているため、教科書の執筆者は動作主体がどのような意図や目的においてその行為を行なったのかをわかったうえで記述することも可能である。こうした点から、教科書に記述されている人物の意志、意向、努力、意図、目的という意味として説明するだけで終わってしまうことがあるかもしれない。

しかし、シヨウトスルの基本的な意味は、意志決定が可能な動作主体が自己制御性をもつ動詞による行為の実現(限界達成)にむけて何らかの行為を行なうと理解しておくことが大切である<sup>7)</sup>。たとえば、(27)では「…幕領にしようとなりました」「…対応しようとなりました」(一重下線部分)のように、シヨウトスルの文が連続する。これらの文に動作主体は明示されていないが、その前の文章から読んでいくと、(27)には水野忠邦が行なった天保の改革が記述されていることがわかる。そして、この「大名領などを幕領にすること」と「薪水給与令を出すなどの対応」へむけた行為(天保の改革として行なわれたこと)は、「しかし」(波線部分)以下に記述されているように失敗に終わる。このように、これらの文を理解するためには動作主体の意志、意向、努力、意図、目的があったということではなく、動作主体(水野忠邦)により具体的な行為(改革)が行われ、それが失敗に終わったということの理解が優先されるだろう。

- (27) そして、年貢の確保のため、江戸に出ている農民を村へ帰らせ、江戸や大阪周辺の大名領などを幕領にしようとなりました。外国に対しては薪水給与令を出すなどして対応しようとなりました。忠邦が進めた天保の改革は、大商人をおさえ、農村を立て直し、外国への備えを積極的に行おうとするものでした。しかし、性急な改革は、力をつけてきた大名や商人などから反発を受け、2年余りで失敗しました。(帝国)

(27)では「…積極的に行おうとするものでした」(二重下線)という文もある。この文では、文末に「ものだ」を用いることで、「その前の部分に表された事態が、客観的に存在している」(日本語記述文法研究会2003:219)ということを表わしており、つまり、この文の前で述べた「…幕領にしようとなりました」「…対応しようとなりました」ということがらを「…を積極的に行おうとする」ものとしてまとめた、水野忠邦の天保の改革の本質を述べる文であるといえる。このように、言いかえられ、モダリティ形式とくみあわせることでコト的な表現となると、意志、意向、努力、意図、目的という面が強くなる。しかし、そうだとしても、ここでも「…を積極的に行おうとする」という行為は失敗に終わったということを理解する必要があるだろう。

### 7. 2 シヨウトスルの「直前」性について

先行研究では「発生直前の状態」(森田良行・松木正恵1989)、「動作の直前」(永井鉄郎1997)として、「夕日

が沈もうとしている。」のように、非自己制御の動詞（非意志動詞）がシヨウトスルの形をとる場合にこうした意味となることが述べられている。歴史教科書の本文には、シヨウトスルの形をとる動詞が非自己制御の動詞（非意志動詞）はみられなかった。

また、先行研究では、「～しようとした。ちょうどそのとき、…。」や「～しようとしたとき、…。」のような文で用いられた場合や「～しようとしている」の形となる場合に自己制御性をもつ動詞（意志動詞）も「直前」の意味を表わすということが述べられている（永井鉄郎1997, 山崎恵1998など）。前者の場合は、構文的にシヨウトスルの行為と後続の行為とに時間の間隔がないことが示されることから、直前性が前面にでてくるというものだろう。後者の「～しようとしている」の形で用いられた場合で自己制御性をもつ動詞（意志動詞）が「直前」の意味を表わすというのは、⑳8のような例である。金田一春彦（1955：43）は、こうした「～しようとしている」を「ある動作・作用がまだ起こらないが起こる前の状態にある」ということを表わす「将然態」とよんでいる。

㉒ (マラソン大会の実況者) 田中選手がまもなくゴールしようとしています！ (作例)

本稿の4～6の分析から考えると、㉒は「ゴールする」という行為の実現（限界達成）にむかっているということを表わしている。つまり、この文ではシヨウトシテイルという形で動作主体が「ゴールにむかっている状態にある」ということを表わしているといえるが、㉒は歴史教科書の記述とは異なり、マラソン実況において行為を詳細にとらえて述べようとしているため、「ゴールする」という行為は実現（限界達成）にかなり近い状況にあるといえる。㉒は日常生活で子どもたちが耳にする形であることから、このような用例についても説明ができるようにしておくことは必要だろう。

「直前」ということについて、㉒も自己制御性をもつ動詞（意志動詞）が「直前」の意味を表わしているように見える。「～しようとしている」の形ではないが、これも行為を詳細にとらえて述べるものであるといえるだろう。また、㉒では太郎が「なぐるという行為にむかう行為をした」ことに対し、花子がそれを止めたことが述べられており、「直前」の意味が生じることにはシヨウトスルの文に後続する文で述べられる内容も関係しているといえる。

㉒ 太郎が次郎をなぐるとした。しかし、花子がそれをとめた。(作例)

現実世界に生じるできごとは切れ目なくつづいていく。しかし、我々が言語化する際には切れ目なくつづく世界から一部分を切りとって表わすしかない。シヨウトスルの形で表わそうとしているのは、繰り返しになるが、その形をとる動詞の実現（限界達成）にむけて何らかの行為を行なうという部分であるだろう。さらに例をあげると、㉓は映画のシナリオの用例である。「出て行こうとする」（一重下線）の部分では、「出て行く」という行為の実現（限界達成）にむかう行為が行なわれている。そこにはその動詞の実現（限界達成）も意識にはあるだろう。だが、動詞が実現（限界達成）するのは「出て行く」（二重下線）という動作が成立する時点においてである。つまり、シヨウトスルの文の「直前」という意味は副次的に生じる意味で、「直前」という部分に力点があるわけではない。ただし、うえて述べたように、接続助詞、副詞、接続詞など構文的な条件や文脈が整うことで、直前性が前面にでてくることはあるだろう。

㉓ 長谷川「じゃあな」と、店を出て行こうとする。

マスター「ビール代、まだもらってないよ。ツケは勘弁してくれ」長谷川、ポケットから小銭を出してカウンターに叩きつけ、出て行く。(映画深夜食堂<sup>8</sup>)

## 8. おわりに

この論文では、日本語支援を必要とする生徒に歴史教科書に用いられたシヨウトスルの文を説明する際に、どのような留意点があるか述べてきた。

シヨウトスルが文末や従属節の述語に用いられた場合、シヨウトスル文について、後続文との関係とあわせて、「意志決定が可能な動作主体が自己制御性をもつ動詞による行為の実現（限界達成）にむけて何らかの行為を行なう」という文の内容を説明することが有益である。その際、生徒に対し、二つの文の関係を理解することを手



がかりにシヨウトスル文の内容の理解へとつなげていくような支援ができるだろう。ただし、後続文がない場合があったり、従属節が中止形の場合は意味がとりにくいことがある。

シヨウトスルが名詞を修飾する場合は、被修飾語となる名詞のタイプ（意志決定可能なものであるか否か）により、シヨウトスルの動作主体が文のどの部分に表わされるかが異なるため留意が必要である。

そして、シヨウトスルが文末や従属節の述語に用いられる場合、シヨウトスルが名詞を修飾する場合とも、シヨウトスルの動作主体にヒトではない朝廷や幕府などの語が意志決定をもつものとして用いられる場合がある。さらに、動作主体が誰であるのかがわかりにくい文もある。このような場合、生徒が文の内容について理解できているのか特に注意が必要である。

分析した用例はシヨウトスルの動作主体が意志決定可能な三人称（有情物）で、シヨウトスルの形をとる動詞も制御性をもつ動詞（意志動詞）であった。歴史教科書の本文にはシヨウトスルに関して、動作主体も動詞も非制御なものはみられなかった。これは歴史教科書には、具体的な時間（過去）における具体的な動作主体の行為が描かれるということが関係しているといえる。地理や公民の教科書のシヨウトスルについては別稿としたい。

以上、歴史教科書のシヨウトスルの文を説明する際にどのような留意点があるか述べた。こうした留意点を日本語支援者だけでなく、社会科担当の教員にも知ってもらい、日本語支援を必要とする生徒に教える際に役立ててもらいたい。

## 付記

本研究は科研費（課題番号 19K20818, 21H00536）の成果物である。

## 参考文献

- 金田一春彦(1955)「日本語動詞のテンスとアスペクト」、金田一春彦編(1976)『日本語動詞のアスペクト』, pp.27-61, むぎ書房に所収。
- 國澤里美(2014)『現代日本語における「認識のモダリティ」—世代差が生じる要因—』名古屋大学大学院国際言語文化研究科提出博士論文。
- 志村ゆかり(2020)「年少者(中学生)向けの日本語総合教科書の意義とその在り方—教科につなげるための日本語シラバス構築を目指して」『一橋日本語教育研究』8, pp.1-14, 一橋日本語教育研究会。
- 竹村和子(2004)「「～ヨウトスル」と「～ヨウトオモウ」の機能の類似と相違」『言語と文明』2, pp.78-90, 麗澤大学言語教育研究科。
- 永井鉄郎(1997)「「～ようとする」の意味と用法について」『日本語教育』92, pp.189-199, 日本語教育学会。
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房。
- 日本語記述文法研究会(2003)『現代日本語文法4』くろしお出版。
- 松岡弘監修(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク。
- 森田良行, 松木正恵(1989)『日本語表現文型』アルク。
- 山崎恵(1998)「「～ようとする」の意味と機能」『姫路獨協大学外国語学部紀要』11, pp.302-316, 姫路獨協大学。
- Cummins, J(1984)*Bilingualism and special education: Issues in assessment and pedagogy*. San Diego, CA: College-Hill.

## 注

1. 日本語能力試験とは、公益財団法人日本国際教育支援協会と独立行政法人国際交流基金が主催する日本語を母語としない人たちの日本語能力を測定し認定する試験のことである。認定のレベルはN1, N2, N3, N4, N5があり、N1が最も難しい。一般的にN3は中級前半あたりのレベルの日本語学習者が受験する。
2. 用例の出所は教科書の出版社名の前半2字で示すことにする。
3. この研究は志村ゆかり(2020)の考え方に基づいて行なったものである。
4. いずれも平成27年3月31日検定済教科書である。
5. 教科書というテキストの影響もあると思われる。

6. このような修飾語と被修飾語の関係について日本語学, 日本語教育学の分野では, 6. 1 で述べる名詞修飾を「内の関係の名詞修飾」, 6. 2 で述べる名詞修飾を「外の関係の名詞修飾」とよぶ(松岡弘監修2000: 182-189)。
7. 竹村和子(2004)では, 三人称主語のシヨウトスルが「-シタ」「-シテイタ」の形となる場合, 「彼は温泉に行こうとした。」「彼は温泉に行こうとしていた。」という用例をあげ, 「過去の目標達成のための行為を表している」と説明している。しかし, この説明の「目標達成のため」とする部分には疑問が残る。竹村和子(2004)の説明に対し, 本稿は「過去の行為の実現(限界達成)にむかっているということを表している」と考える。
8. 「映画深夜食堂」(真辺克彦, 小嶋健作, 松岡錠司)は『'15年鑑代表シナリオ集』(日本シナリオ作家協会編, 2016)から引用した。

# **Analysis of *Shiyootosuru* Use in Describing Past Events in Junior High School History Textbooks**

MIYABE Mayumi

This paper analyzes the use of *shiyootosuru* in the junior high school social studies history textbooks. The analysis revealed that to comprehend the sentences of *shiyootosuru* used in history textbooks, it is important to consider the *shiyootosuru* sentence together with the sentences following it. Moreover, when *shiyootosuru* is used as a noun modifier, it is necessary to focus on whether the noun as a modifier has a volitional meaning and the action subject of *shiyootosuru* is expressed in which part of the sentence.

The analysis highlighted the importance of focusing on the controllability of verbs in the form of *shiyootosuru* and their action subjects to understand *shiyootosuru*.